

研究員卒業レポート

「出会い」という財産

客員研究員 坂本 耕紀
(久万高原町企画観光課)

手帳をめくると、そこに記された事柄にリンクして、沢山の方々の顔が鮮明に蘇る。

えひめ地域政策研究センター(以下「センター」)に着任した日、机には各研究員が担当する業務が書かれたペーパーが一枚。私の名前の横には「移住交流促進事業」の一行が記されていた。

以降、仕事のほぼ大半をこの事業推進に費やすことになったが、その過程で移住交流という視点からまちづくりに関わる県内外の行政職員やNPO、民間組織の方など、数多くの人と知り合う機会を得ることになる。

センターに在籍した2年間の派遣勤務で得た財産を一言で表すなら、やはり「出会い」であったと、今改めて思う。

「伊座利」との出会い

平成19年の夏、徳島県にある小さな集落を初めて訪ねた。

「何も無いけど何かあるー。」興味をそそるキヤッチコピーで、訪れる人を虜にする小さな漁村が徳島県にある。子どもから大人まで、一緒になって生き生きと活動している小さな漁村「伊座利」との出会いは衝撃的であった。

きっかけは学校の統廃合問題。学校存続の危機を、住民が自分の問題としてとらえた瞬間から、地域が自立に向かって歩みはじめた。漁村留学生の受け入れや空き家の確保といった移住交流の促進が地域の活力向上に結びついている、全国にもその名を知られた地域である。伊座利に住む全住民が構成員の「伊座利の未来を考える推進協議会」が活動主体であり、地域資源を活かした様々な事業を展開しているが、グローバルなネットワークを有し、内と外とを結びつけるコーディネートターとして、良い意味で公務員の殻を破った草野裕作さんという役場職員が存在が地域には欠かせない。

草野さんはもちろん、伊座利のおつちやんたちはみな個性的であり、人なつっこく、そして芯がある。地域への誇りと愛着は人一倍強い。自らの主張をとことんぶつけあいながら、地域には何が必要かを真剣に議論する。その結果、新しい知恵を新たな地域づくりにつなげていく



交流イベント「おいでよ海の学校へ」のひとコマ





伊座利の「核」草野裕作さん(センター主催のトークサロンにて)

という好循環がここには存在する。伊座利に興味を持って3年あまり。センターを離れた今年の夏も、毎年開催されている手づくりの交流イベントに参加することができた。

参加した人に楽しみながら地域を知ってもらおうと、伊座利の子どもたちが「先生」になる手長エビ捕り体験やカヌー遊び、漁船を使ったクルージングなど地域総出の催しである。豪快かつ温かな手づくり感が受けてか、参加希望者の数は年々増え続けているという。

イベントが終わった後、反省会と称する地域の懇親会にも参加させてもらった。地域内の連携を大切にしながらも、決して排他的ではないおっちゃんたちと本音で盛り上がった宴はとても楽しいひと時であった。

また何度も足を運ぼうと思わせる何かがある。ここにはある。「何もなければ何かある」。その何かとは、おっちゃんたちをはじめとする、伊座利に住む「人」の魅力

力であり、伊座利の人々が連綿と紡いできた伝統と、新しい風を吹き込んでくれる多くの移住者との融合から生まれた、ここにしかない風土なんだろうと思う。(伊座利の詳細は平成19年10月発行の舞たうん94号をご覧ください。)

核になる人

伊座利の例に限らず、元気な地域には「核」になる人が必ずいる。

それは地域に暮らす住民であったり、外から移住してきたいわゆる「よそ者」であったり様々だが、共通点は「核」になる人を中心に、強い危機感を住民が共有することからどこもスタートしていることだろう。センター職員として訪れた数多くの地域で、そんな「核」になる多くの人と出会えたことは、幸運の一言に尽きる。

その「核」に自分になれるとは思っていないが、地域が新たな視点で活動を展開しようとするとき、私たち行政に携わる者が、ときには行政職員という枠を超えて果たさなければならぬ役割が必ずあるはずだ。その意味でも、センターで得た自分なりの2年間の成果をしっかりと胸に刻み、地域からの発想を大切にしてい日々の業務にあたりたい。そして、自分自身が誇りを持てるまちづくりに向けて、情熱を持って、手の届くところから行動を起こしていきたいと思っている。



もうひとつの財産、2年間の取材ノート・メモ

このレポートを書くにあたり、当時の手帳・取材ノートやメモを読み返すことで、センターで過ごした日々をつぶさに振り返ることができた。

あつという間の2年間ではあつたが、間違いなく濃密で充実した毎日だった。センターで共に過ごした同僚はもちろん、移住交流業務を担当するなかで出会った多くの人や地域は私の心の支えであり、行政に携わる者としての今後の在り方に示唆を与える、生涯の財産である。

センター在籍中にお世話になったすべての方々に、この場をお借りして心からお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。